奈 良 女 子 大 学 附 属 学 校

Newsletter

附属学校ニュースレター

全国国立大学附属学校連盟 副校園長会 研究会（奈良大会）

附属中等教育学校副校長　吉田　隆

第51回全国国立大学附属学校連盟副校園長会研究会並びに平成26年度日本教育大学協会附属学校連絡協議会副校園長分科会を、平成26年10月30日31日の二日間、ホテル日航奈良にて開催しました。全国の国立大学附属学校園264校が一堂に会する全国大会を、奈良女子大学附属学校園が担当しました。

奈良開催が決まったのが、2年前の岡山大会のときで、この間、全国の先生方をお迎えするための準備を進めてきました。大きなハプニングもなく、全国大会を終えられてホッとしているところです。

開会行事では、全附連会長の田中一晃先生が、現在の附属学校園を取り巻く状況を、次のように総括されました。「現在、教育界を大きく揺さぶっているものとして、『道徳の教科化』と『少子化問題』がある。2018年度より、道徳が教科として教育課程に位置付けられる見通しとなった。日本の道徳教育が間違った方向にいかないよう、私たち附属学校が実践を通して正しい方向へ導いていきたいものである。また、少子化により、財務省が『教育予算を減らす』という。資源の乏しい環境にあって、豊かな人材を育成することは我が国には求められているはずで、そのためにはゆとりをもって教育を行う環境が必要である。これは教員養成大学・学部、附属学校の運営に大きく影響してくる問題で、決して他人事ではない。国や自治体の動向に目を光らせ、私たちもそれぞれの立場で物を言っていく必要がある。」

続いて、今岡春樹奈良女子大学学長に来賓代表として祝辞を述べていただきました。

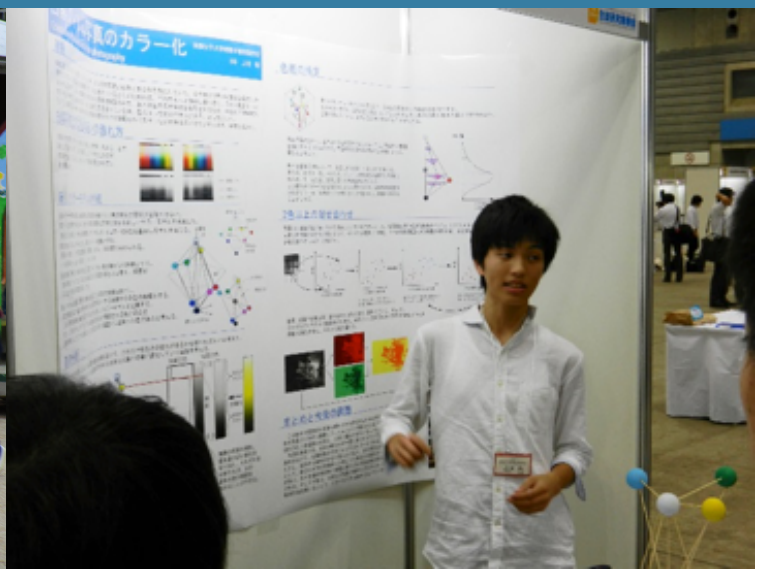
次に、文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室教育大学係長の安藤優樹氏から、「教員養成の改善・充実と附属学校への期待」と題して、「教員養成に係る現状と課題」「教員養成の改革と充実」「国立大学の機能強化」「大学院段階の教員養成」「附属学校の取組」について説明がありました。

全体会後の講演では、西山厚氏（帝塚山大学文学部文化創造学科教授）より、「歴史の力、文化の力」と題して、東大寺正倉院の宝物にまつわる話をお聞きしました。「すべての動物、すべての植物が、ともに栄える世の中を作りたい」という聖武天皇の願いとはいかなるものかを解き明かすには、小さな力をたくさん集めることによって大仏開眼を実現したところにあり、正倉院の宝物が今に伝えられてきたのは、聖武天皇を亡くした光明皇后の耐え難い悲しみがあったからだと考えてみることで、様々な宝物の見え方が違ってくるということでした。千二百年前の仏像や宝物が今に伝えられているところに歴史の力、文化の力があり、それらを伝えることが大事であるという話でした。

1日目の最後に懇親会を催し、203名の先生方が参加されました。懇親会の場では、理事・副学長の角田秀一郎附属学校部長に祝辞の後、乾杯の音頭をとっていただきました。アトラクションの部では、卒業生の榊原明子さんにピアノ演奏をしていただきました。

2日目は、校種別分科会を奈良女子大学附属学校園副校長園と主幹の先生方に世話役として進行していただきました。

2日間の奈良大会開催に際し、奈良女子大学関係者の皆様にはご臨席賜りご祝辞等いただきましたこと、また、3附属学校園のPTAの皆様にはボランティア等で案内係を引き受けていただきましたことに深く感謝申し上げますとともに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



保育コース・学級定員改定
附属幼稚園

平成27年度4月から、子育てをめぐる課題解決に向けて「子ども・子育て支援新制度」が始まります。新制度の政策の1つに、高い質の幼児期の学校教育と保育を総合的に提供するために、幼稚園と保育園のそれぞれの良さを併せ持つ「認定こども園」の普及があります。奈良市内には、認定こども園がすでに4園あり、今後も幼稚園と保育園が統合され、順次認定こども園になっていき、3年保育が主流になっていきます。

そこで、当園でも、将来のことを見据えて、この3年保育コースと2年保育コースの2コース制を4月から3年保育コースのみに改定します。さらに、学級定員を4・5歳児は30名から24名に、3歳児は15名から24名に改定します。

社会では、すでに3年保育で子どもを入園させるのは当たり前になっています。当園でも3年保育の入園希望者は多数いるのに対して、2年保育の希望者はかなり少ないのが現状でした。そのような社会状況に附属幼稚園の制度が合っていなかったと言えます。

しかし、その対応は非常に迅速でした。奈良女子大学には附属学校園の方針を決める会議があり、大学と附属が一体となって運営をしています。その会議で附属幼稚園の現状と課題を伝え、保育コースと学級定員改定が1年で大学の方針になりました。そして、関係省庁と交渉を始め、正式に認められるまで1年、合計2年と非常に短期間で実現しました。

奈良女子大学は規模の小さな大学ではありますが、その分大学と附属学校園との距離が近いです。小さな大学だからこそできる挑戦を今後も続けていきたいと思います。

生徒の活躍ー各方面で活躍した５年生ー
中等教育学校

今年度の5年生は、学園祭の差配や自分たちの修学旅行の実施と大変多忙であったが、同時に独自の道で活躍した諸君もいた。そんな生徒を3人紹介したい。

■桝田奈央さん

「高校生平和大使」は毎年公募で選ばれ、国連を訪問し、核兵器廃絶と平和な世界の実現を訴えてきました。帰国後も各地での活動報告や署名運動など約1年間活動します。桝田さんはそれに応募し、見事にその代表に選ばれました。夏休みに広島・長崎の訪問を皮切りに、スイスジュネーブの国連欧州本部において核兵器廃絶の演説をしてきました。また、帰国後も各所で核廃絶を訴えて署名活動を続けています。

■山崎弘瑛さん

国際社会におけるリーダーとして活躍できる人材の育成を目的として社会貢献事業の一環として活動しているAIU高校生国際交流プログラムに山崎さんは選ばれ、7月から8月にかけて高校生外交官として米国に派遣されました。1987年の発足以来、延べ1,300名を超える日本の高校生が米国に派遣され、現地で同数の米国高校生と活動をともにしています。

■上田樹くん

8月にパシフィコ横浜で開かれたSSH全国生徒研究発表会で、本校代表・上田君の「白黒フィルム写真のカラー化」が、科学技術振興機構理事長賞を受賞しました。また、第12回高校生科学技術チャレンジ　JSEC2014において文部科学大臣賞・ISEF日本代表にも選ばれました。これはオリンピックに例えれば「金メダル」を獲得したことになります。

附属小学校28年間を振り返って

附属小学校副校長　日和佐　尚

昭和62年（1987年）、32歳で附属小学校に赴任して以来、早くも28年が過ぎました。様々な方との出会いや子どもたちとの生活を通して、私は次第に教師らしくしていただきました。

赴任当初、「どうぞ、ご自由に」と言ってくれた副校長先生の広くて深い懐に守られて、創造的な実践を行うことができました。「子どもは生きていたか」と諭してくださったＯＢの先輩先生には、「君が頑張ったら、子どもは頑張れないんだよ」と主体的・自覚的な学習法の根本を教えていただきました。私が自然に気がつくことを期待して、尊重して、待っていてくださったことをうれしく思います。意味深長で温かい言葉をかけていただいたことが、私の学習法の基礎を作ることになりました。人を尊敬し、その人なりに「伸びて行く」教師に成長することを教えていただきました。

保護者の方々にも支えられて、教師らしく育てられたように思います。「教室のお花が枯れたら、先生の教育の愛が枯れてしまうからね」と、せっせと花瓶の花を入れ直してくださったお母さん。「先生、何かお手伝いすることはないですか」と言って、教室環境を整えてくださったお母さん。「教室は暑いから、この扇風機を使ってください」と新品を持ってきてくださったお父さん。私や子どもたちは守られていたんだなとうれしくなりました。6年間が終わり、卒業式の日に、「二回り目のお母さんたちは、私たちより若いけど、私たちのように守ってくれるかどうか心配です」と言われ、「守られていたんだな」と気がつきました。勿論二回り目のお母さんとは、ほぼ同年齢で楽しく過ごすことができ、三回り目のお母さんとは私の方が年上になったので、相談にも乗ってあげることもありました。いずれにしろよき保護者と巡り合えて、教師として成長してきました。

同僚や先輩の先生方から教えられたことは数多くあります。「木下の『（学習）原論』を読みなさい」「『（学習）各論』を読みなさい」「『確かな教育の方法』を読みなさい」と次々に著書を紹介してくださって、その後は、レポートを作って意見発表会をさせられました。「学習法を自分はどう捉えているのか」については、公式な研究会は勿論その後の「会食会」でも、大いに議論しました。そうして「学習法」の奥深さと捉え直しを行いながら、自律的学習法の何たるかが少しずつ分かってきたように思います。

私の算数学習の実践も長年かかって確立してきました。一つは「街角の算数（算数研究）」で、もう一つは「教科書算数」です。「教科書算数」の目的は、「きっちりわかる・きっちりできる」です。わかったつもりにならず、人に説明して考えを理解してもらえれば、はじめて自分もわかったと言えます。基礎基本の内容の学習です。基礎基本は活用してこそ値打ちがあります。そこで子どもの身の周りで、「数・量・形」などが活用されている足元、つまり「街角」に目を向けて、世の大人たちが数理を活用して快適・安全・効率・美などを求めている姿を研究する「街角の算数（算数研究）」が大切になります。研究の世界ですので、目的は「おもしろいなあ・ふしぎだなあ」という感性をくすぐるものです。算数の視点で「街角」を見て、研究を続けていると、豊かな生活を築こうとする向上的視点で再度「街角」を見つめるようになります。そして、「恒常的街角の事象」が新たな足元たる生活になります。

赴任して10年目、4年生の9月のことです。

いつものように算数の学習を始めようとしたら、「先生、おたずねがあります」と言われ、なぜ算数の授業だけ先生が進めるのかを問われました。それがきっかけになって、「自分たちで進める算数学習」つまり「教科書算数」が自律的自覚的に行われるようになりました。進め方は、子どもたちとの協同作業でした。発表をしたあとの「いいですか」ではなく、「どうですか」がおたずねを誘う上でよいとか、おたずねに発表者が答えたあとフロアーから付け足しの意見を数多く言うとか、おたずねした人はわかるまで立って聞いて、わかったら挙手をして司会に指名されたのちにどのようにわかったのかを言ってから座るとか、いろいろなアイデアを出し合って一緒に授業を作っていきました。

私は、「子どもはその子なりにできる存在だ」「子どもを尊敬し、信じ合って互いに伸びて行く」ことの大切さを学び、「自分をよりよく変え、自分なりのものを創造する勇気をもらった」と思い、常に一歩前進していくことの大切さを学ばせていただきました。

近くで支えてくださった多くのみなさん、お世話になりました。

「ありがとうございます。」

「『子どもだけ』でできるよ」

附属幼稚園　柿元みはる

今年度は昨年度のクラスをそのまま持ち上がり、年中組の担任となった。年少組は3人の教師で担当していたが、年中組になると教師は1名になる。そのギャップは子どもにとっても教師にとっても大きい。しかし、それは、これからは自分たちでしなくっちゃ、という意識をもたせ園生活の自立につながるステップアップのチャンスでもあると捉えた。

進級して張り切っている時期に、今までは教師がしていたことをできるだけ子どもがするようにと考えた。間食の時お茶を注ぐ、カレンダーの日付を変える、先生からのお知らせを伝達する等、子どもが興味をもちそうなことから子どもに担当させた。

6月のことである。「アナと雪の女王」が大流行。片付けの時間に「氷になれ！」と子どもに魔法をかけられ私は固まってしまう。「先生、動けないんだけど、誰が片付けて誰がおやつの準備するの？」「子どもだけ。」「それは大変でしょう」「できるよ。先生100数えたら来て！」「先生が溶けて動く前に、みんな、片付けて。」「早く座って。」と友達同士声を掛け合い、片付けが進んでいく様子がわかる。

うまくいく方法を与えられ、子どもは苦労せず生活できる世の中である。子どもの力を信じ、力を出す機会を作ることで、子どもは成長するのだということを改めて考えさせられた1年であった。

「一年間をふりかえって」

附属小学校　中野直人

早いものでもうすぐ本校に勤務して一年。行事・研究会・原稿に追われながらあっという間に過ぎていったように思います。

一年間を振り返ってみると、趣味の合気道は、以前は時折回ってくる道場の指導日に緊張していたのですが、最近は「自分の技を、自分の言葉で思い切り表現すればいい」と思え、楽しく指導できるようになりました。この事は、自分の中ではすごい成長というか「進化」です。

また、３年間、植物園での学習会に参加していたのも「教わってばかりで身になっていない」と改め、本校の子どもたちがやるように、独自学習を行うように変えました。まだ、始めたばかりで効果は見えませんが、しばらく頑張ってみようと思っています。

子どもたちや保護者からは、「おでかけ」をしながら学ぶ大切さを学びました。大和川、木津川、建仁寺、博物館、資料館、灘黒岩水仙郷、六甲高山植物園などおでかけしながら、楽しく学ぶ事ができました。分からない事があれば、博物館や、専門家におたずねをしています。子どもの独自学習に負けないようにこれからも頑張っていきたいと思います。

先輩の先生方とも仲良くしていただいています。ありがたいことで、飲みニケーションだけでなく、私の趣味の銭湯通いにもつきあってもらいました。本校に来てよかったなあと、子ども・保護者・先生たちと接していて思っています。２年目は「慣れ」から飛躍の一年にしたいです。

「6年間の担任を終えて」

附属中等教育学校　山口啓子

この春に6年間担任をした生徒たちが附属を旅立ちます。初担任で迎えた生徒たちとの怒涛の日々ももうすぐ終わりだと思うと、不思議な気持ちです。

生徒の成長は目覚ましく、担任として関わりながら、低学年から高学年にかけて本校の精神が様々な活動を通して培われていく様子を目の当たりにしました。生徒はとても頼りになる存在へと成長し、学園祭や修学旅行、国際交流、クラブ活動などそれぞれが選んだステージで立派に活躍してくれたと思います。

教科教育の面では、６年間を通して英語を担当しました。学年が上がるごとに試行錯誤しながら自分なりの授業を模索する過程は、まさに修行のようでした（この修行はまだまだ続きますが）。英語教育を通して生徒に何を残せたのかを自らに問いつつ、身につけた英語力が彼らの可能性を広げる手段となってくれることを願っています。

生徒は鏡のような存在であり、彼らと向き合うことは自分自身と向き合うことでもありました。色んな状況を抱える生徒と関わる中で、時に自分の無力さに落ち込むこともありましたが、等身大の自分でぶつかっていくことでちゃんとつながり合えるということも実感しました。一人ひとりの生徒への感謝の気持ちを胸に、私も新しく出発していきたいと思います。

奈良女子大学附属学校部　〒630-8305　奈良市東紀寺町1-60-1 TEL.0742-26-2571　Web http://www.nara-wu.ac.jp/fuzoku/